【46】

| | |
|---|---|
| 氏　名（本　籍） | 中田裕久（栃木県） |
| 学位の種類 | 学術博士 |
| 学位記番号 | 博甲第198号 |
| 学位授与年月日 | 昭和58年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第1項該当 |
| 審査研究科 | 芸術学研究科　芸術学専攻 |
| 学位論文題目 | 都市空間の認知・評価に関する研究 |
| 主　査 | 筑波大学教授　工学博士　土肥博至 |
| 副　査 | 筑波大学教授　阿部公正 |
| 副　査 | 筑波大学教授　吉岡道隆 |
| 副　査 | 筑波大学教授　池原謙一郎 |
| 副　査 | 筑波大学教授　工学博士　栗原嘉一郎 |

## 論文の要旨

生活環境は，自然および人工の物的環境や種々のサービスを含めた文化・社会環境によって構成されている。こうした環境が個人に対し様々なメッセージを与え，個人はそれを何らかの知識体系によって把握し，行動を起こすのではないか，という仮説がK. E. Bouldingによって提示されて以来，この人間行動と環境との間に介在する心的メカニズムの解明が，環境計画のみならず，広く社会一環境問題解決の糸口を与えるものとして，多分野にわたって検討が加えられつつある。

こうした個人と環境の多層にわたる関連の仕組みを明らかにするためには，具体的な条件下における個人の生活体験につちかわれた心的状況を様々なフェーズで把握し（たとえば，視覚的イメージ，感覚距離，イメージ・マップの構造等），そのフェーズで把えられた一般的傾向ならびに各フェーズ間の関係を求めることが必要である。とくに，環境の空間計画で指針とされる個人の行動は，要求の発生，環境の認知ならびに評価，行動の実施，その結果による認知構造の変化や評価基準の修正という継起的・重層的プロセスの中で生起するものであり，一方，その結果として個人がその内部に獲得した環境についての知識（この研究では認知と呼んでいる），環境についての価値判断（同じく評価と呼んでいる）によって，その人にとっての環境の意味が決定されると考えられる。

本研究は，具体的な環境条件下における居住者や訪問者などの諸集団を対象とし，人々の移動に代表される行動実態のフェーズと認知・評価に代表される環境の認識のフェーズのふたつの側面か

ら，環境と人間との対応関係についての基礎的知見を得ること，およびその知見にもとづいて環境計画の指針を得ることを究極の目的としている。論文は6章からなっており，各章における考察内容は以下のとおりである。

第1章では，K. Lynchの提示した“環境のイメージ”という概念について，心理学，地理学，都市計画学などの分野で論じられてきた内容を概観し，つぎに，物的環境の諸属性と認知との関係についての既往の研究を批判的に考察して，本研究の方法論の位置づけを行っている。また，本研究における人間―環境の相互関係の探索についての課題を明示し，以下の各章でそれらの課題をどのように検討してゆくかについて要約している。

第2章では，筑波大学の長期居住学生のキャンパスにおける移動実態および環境の認知，評価の状況を調べ，長期居住学生の認知には性別，居住地，居住歴別などによる差異はみられず，すでに環境についての知識は安定したレベルに達していること，またこの集団では，行動と認知との関係が微弱であることを明らかにし，次章以降の考察の原点を示した。

第3章では，筑波大学の新入生に対し，約半年にわたって5回の追跡調査を行い，人がどのように新しい環境を認知して行くかを調べた結果，環境の認知はごく短期間（ほぼ1ケ月）のうちに安定化し，この期間における個人の認知レベルは移動経験と正の相関をもつことを確認した。また，場所の認知には，その場所の属する地区機能，位置する動線の重要性などの条件が強く関与すること，その条件が同等の場合，K. Lynchのいうパスはエッジやランドマークに比して認知されにくいことを明示し，このことから，人々は新たな環境において，特色ある場所をまず認知し，それらの位置関係や方向性を基準にパスを理解する，というプロセスで環境の構造化を行う，という新しい解釈を明示している。

第4章では，土浦市における居住者と訪問者の環境認知の差異を考察し，訪問者は上述の新入生と同様，行動に応じて場所を認知してゆく傾向，視覚的な手がかりに依存する傾向がいずれも強く，環境に対して＜反応的＞であり，一方，居住者は行動と場所の認知との直接的な関係が弱く，また視覚的な手がかりへの依存度は小さく，環境に対してより＜推論的＞になっており，第2章の長期居住学生と同様の傾向が認められることを示している。

第5章では，環境計画にもう一歩近づいて，人々の場所あるいは施設に対する心的方向性の存在とそれを構成する環境の要因について考察している。そのために，筑波大学の歩行者空間に位置する様々な場所において，学生がどの方向に親近感を感じているかを調べ，心的方向には，居住地を起点として目的地に向うマクロな方向性と，その場所周辺の空間構成に影響されるミクロな方向性があること，単なる通路空間では認知方向が移動軸方向に集中するが，沿道左右に認知を誘発する要素（広場の奥行，池などの視覚的区別性の高い要素，公共性の高い施設等）がある場所では，認知は移動軸と直交する方向に集中すること，したがってそこは前後の場所とは独立した焦点として意識化され易く，かつ選好され易い場所であることを明らかにした。したがって，人はマクロな心的方向と同時にその焦点を意識するミクロな方向を持っており，前者が明示的であれば空間の判読性は高く，後者の心的方向をもたらす焦点が多ければ空間のイメージ性が高くなるとし，歩行者空

間における焦点の形成方法について論じている。

第6章は，上の各章の検討結果を再構成し，人の空間環境についての知識のレベルと空間的特性との全般的な対応関係，特性による知識の差異，評価空間の特性などに分けて考察している。また，本研究の課題であるミクロスケールの環境についての知識形成に関しては，K. Lynchの規定するレジビリティ（知覚のし易さ）よりも行動を誘発する機能・施設の存在が重要であること，同じく大スケールの環境の理解のし易さはパス構造の単純性に依存するが，ミクロスケールではパス構造よりも焦点群の存在，すなわちミクロな心的方向の多様さが重要であることを示し，環境計画への指針として位置づけている。

## 審　査　の　要　旨

人間と環境との相互作用の心理過程に関する研究は，都市空間に限らず最近盛んに行われており，著者の研究もこの範ちゅうに属するものである。しかし，多くの研究が心理過程そのものの解明を目指したものであり，数少ない空間的環境要因の操作的研究は手続き上の厳密さを欠くものが多い。

著者の研究は，相互作用の全体的関係を崩さずに信頼できるデータを入手するために，独自の調査方法を考案し，これによっていること，環境および被験者集団の双方について充分比較考察の可能な対象を選定していること，章が進むにつれて環境計画への接近の傾向が強まっていること，既往の主な研究仮説や理論との関係を明確に整理し，位置づけていること，などの点で充分な水準に達しており，独自性も認められる。

ただ，環境計画に対して示唆する成果が得られているとはいえ，計画論と呼び得るところまではまとめられておらず，そのため論文そのものが若干未整備な感を抱かせる点は残念である。しかし，この微妙で複雑な課題に対して，慎重かつきわめて手堅い方法によって接近し，地味ではあるが重要な知見を積み重ねたこの研究は，環境計画研究の発展に貢献するところが非常に大きいものと認められる。

よって，著者は学術博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。